

論文内容の要旨

報告番号	空欄	氏名	長 徹二
Two-Year Prognosis after Residential Treatment for Patients with Alcohol Dependence: Three Chief Guidelines for Sobriety in Japan			
アルコール依存症で入院加療二年予後調査：日本の伝統的断酒3本柱について			

論文内容の要旨

アルコール依存症は飲酒をコントロールできない慢性疾患であり、離脱予防を中心とした急性期治療が重要であることに加え、長期間の維持療法が重要な位置を占めている。アルコール依存症にとって「再飲酒は症状」であり、がんの再発や捻挫の反復と同様に理解する必要がある。ただし、単に飲むか飲まないかという行動ばかりが重視されすぎて、人間としての尊厳や生き方の回復といった面を軽視してはいけない。というのも、アルコール依存症の治療予後は治療方法よりも患者の社会的・心理的個人的因子により大きく影響を受けると言われてきたからである。しかし、治療予後に関する調査はその判定基準の信頼性に限定的な要素が多いため、本邦においては、1980年代までは行われていたが、ここ数十年の間では報告は限られている。

伝統的にアルコール依存症の治療において、本邦のどの専門病院でも、その治療指針の中に、「断酒 3 本柱」を掲げている。「断酒 3 本柱」というのは受診継続、自助グループ(断酒会もしくは Alcoholic Anonymous)への参加、抗酒剤の服用の 3 つの治療指針である。「断酒 3 本柱」はアルコール依存症の臨床現場では非常に有名なものの、起源については明確な記録がなく、医学的な文献検索システムでも検索が不可能である。加えて、1 つずつの柱を支持するデータは海外で存在するが、日本においてはそれらすら、前向き研究では限定的である。そのため、本調査は入院したアルコール依存症患者の 2 年予後に関して調べることにより、「断酒 3 本柱」、そしてその柱 1 つ 1 つの有用性を評価することを目的として行った。

対象は、アルコール依存症と診断され、三重県立こころの医療センターに入院した患者全員であり、期間は 2007 年 11 月 1 日から研究参加同意者が 100 人に達するまで(2008 年 8 月 25 日)継続してエントリーし、前方視的に調査した。退院後 2 年後の「断酒 3 本柱」に関する受診継続、自助グループへの参加、そして抗酒剤の服用と 2 年後断酒率との関連について調べた。

退院 2 年経過する前に研究参加中断希望した者が 2 名存在し、最終的には 98 人が対象となった。退院 2 年後の状況として、受診継続者は 48 人(うち 5 人は他院)で、受診中断者は 25 人、死亡者は 14 人(死亡時平均年齢は 54.4 歳)、連絡の取れない不詳者 11 人であった。

断酒 3 本柱を遵守した群と遵守できなかった群との比較を行ったところ、2 年間に死亡した者と不詳者を除くと、断酒 3 本柱を遵守できた者は、2 年間の断酒率は有意に高かった($p < 0.05$)。また、回帰分析において、受診継続、自助グループ参加のみでも有意に断酒率は高く、調整後オッズ比はそれぞれ 5.33 と 3.79 であった。

本研究の結果から、「断酒 3 本柱」を遵守することで、少なくとも退院 2 年後の断酒率を高くする可能性が示唆できる。また、その原則のうちの 1 つの柱を遵守することや柱を組み合わせることで、退院 2 年後の予後を有意に改善することが示唆された。